

「先生」からのラブレター①

2020.1.28

昨年末、こんな話が耳に入った。

六浦小の先生がボランティア学生にクリスマスカードを贈った。「ボランティア、ありがとう」の気持ちを込めたカードであった。これは社会的な慣習の《普通のこと》である。ここで書きたいのはそこではない。その話が私の耳にどういうふうに伝わってきたかである。

その先生や学生から聞いたわけではない。校内の先生方から伝わってきたわけではない。私に伝えてくれたのは校外の人である。当該の先生でも、学生でもない、別の人が私に伝えた……それはなぜ？

なぜ、部外者の、他人が知っていたのか？

年末にあたり、教育学部の数人の先生・事務職員に学生ボランティア等で一年間お世話になったお礼のあいさつに出かけた。

その際、ひとりの事務職員が私にこんな話をしてくれた。

「学生がやってきてカードを見せるのです。六浦小の先生からいただいたと言うのです。『こんなカード、もらった』と、満面の笑みで、そこにいたみんなに報告というか、見せびらかすというか、自慢するというか……まるで《ラブレター》もらったようでした」

その話を聞いたとたん、私は破顔一笑となった。私だけではない、その事務職員も笑顔、その場にいた先生、学生、みんな笑顔となった。その場はしばし《幸せ感》に包まれた。

このボランティア学生の《喜び》がみんなに理解でき、共有化されたのである。

この「ラブレターもらったよう」な学生のふるまいに、学生の気持ちが率直に表現されている。